

Title	リラダンにおける王権のテーマ(3) : 全世界の支配
Author(s)	小西, 博子
Citation	Gallia. 2002, 41, p. 31-38
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11029">https://hdl.handle.net/11094/11029</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## リラダンにおける王権のテーマ (3) ——全世界の支配——

小西 博子

王権がリラダンを魅了したのは、人間が到達しうる最も神に近い位置であるからに違いあるまい。しかも、ただ権力や富という虚栄を満足させるのみならず、王権は夢や理想を実現する手段や機会を与えうる。しかし神ならぬ人間にその位置の虚しさを知らしめるのも王権かもしれない。すなわち王権はすぐれてファウスト的テーマであるということができよう。ルネサンスという精神風土を有し、リソルジメントまでの長い道ゆりをたどったイタリアを舞台として、『イシス』でチュリアが抱いた企図、『王位要求者』でセルジウスが実践することかなわなかった王道。それらは単に権勢欲である以上に、政治的宗教的メッセージを含んでいるように思われる。前二稿では、王権を扱った作品に通底するテーマを明らかにし、リラダンの生きた時代を考えながら彼と王権の関わりをたどった。本稿では、「全世界の支配」というテーマを、「帝国」「変革」という二つの理念を鍵に、西欧の精神史の中に探っていきたい。

作者によれば7巻の大部になるはずであった『イシス』の冒頭には、このタイトルが、「一連の哲学的小説の総合的表題<sup>1)</sup>」であり、作品の完成とともにその意味が明かされると記されている。この作品にはファウスト的テーマが認められること、主人公のチュリアはメフィストーファウストの二重の役割を担っていることなど以前に述べた<sup>2)</sup>。未完のこの作品が、地獄落ちか救済か、マーロウ的かゲーテ的か、いずれにせよファウスト的展開と結末を少なくとも構想として有していたことは想像に難くない。チュリアがルネサンス的な知識と力への意志や秘教的思想の持ち主であることもすでに指摘した<sup>3)</sup>。コズミックな知識で全宇宙を帝国のように支配せんとしたタンバレン大王のようなルネサンス的な無限への渴望にも似て、チュリアもナポリ王国の王権篡奪から、全イタリア、さらには全世界の掌握をも目指す。すでにヨーロッパの各政権や法王庁にまでその影響力を有するとされるチュリアの企ては、「天地はそれを取ろうという人間のものではないのか<sup>4)</sup>」と物質・精神両世界の魔術的支配をも射程にいれているようだ。未完であることの不利を措いて、作者が「ファウストと同等のスケール」(1862年ボード

1) Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes I*, Gallimard, La Pléiade, 1986, p.101.

2) Cf. « Le thème faustien chez Villiers de l'Isle-Adam », *GALLIA*, No.31.

3) Cf. 「Villiers de l'Isle-Adam の作品に隠された意味」, *GALLIA*, No.30.

4) *Œuvres complètes I* (以下 O.C.I と略す), p.193.

レル宛の手紙)とイメージしていた作品における「全世界の支配」の意味するところを再考してみたい。

『イシス』の隠されたテーマが、靈魂の上昇やその目標としての樂園への回帰ではないかという分析を行った際、チュリアの個人的神秘的体験が、原初の統一という普遍的形而上学的目的と相補的にとらえられているという仮定から出発した。『イシス』のディグレッションにみられるように、第二帝政時代を背景とする進歩や物質主義、実証主義、ヘーゲル哲学がもたらした「絶対の死<sup>5)</sup>」は、懐疑や無力感、閉塞感を招き、リラダン<sup>6)</sup>は信仰や神秘的、根源的なものへの回帰、とりわけ地上界と天界の照応という有機的世界観をもつ古代人の学を擁護するのであった。近代の知の限界を指摘する作者は、チュリアの魔術的な知で世界を変革しようとしているようだ。チュリアの内面の変化は、マクロコスモスの変革を目的とするミクロコスモスの変革のプロセスと理解することができる。このオカルティズム的意味合いの世界の変革が底流にあるとすれば、表層にあるのが「帝国の主題」ではないだろうか。

## I. 帝国

チュリアの「全世界の支配」は、あたかもマロウの二つの劇、すなわち知識と力への意志をテーマにした『フォースタス博士』と帝権をテーマにした『タンバレン大王』——ともにあくなき《self-aggrandizement》(自我の無限拡張衝動)の物語である——を合体したかにみえる。チュリアは世界支配を夢見て、ウィルヘルムを君主に仕立てようとファウスト的知力を傾ける。タンバレンの求める「すべての中で最も熟した果実、あの完全な喜び、唯一の至福、現世の王冠の快き充足<sup>6)</sup>」を味わわせ、また自分も味わおうとメフィスト的役割を引き受ける。16世紀前半に実在したといわれる魔術師的人物ファウストの物語は、中世のフォークロアやルター派的説教臭のある民衆本などの形を経て、16世紀末、マロウの手により初めて近代的な人間ドラマとなった。その同時代性においてゲーテの『ファウスト』に勝るといえる。フォースタス博士はルネサンス、大航海時代、宗教改革、反宗教改革を実際に生きた人物にふさわしく、インドやアメリカに金を求めたり、異国の哲学を理解したり、諸王の秘密を手に入れたりしようとする。その欲望は限りない。大砲を発明する。大洋に橋をかける。失われた財宝を発見する。星の運行を読む。自然の秘密を知る等々。ついには「全世界の帝王」になる野望を抱く。一方、クレオパトラのように数か国語をあやつり、古今の万巻の書物を備えた図書室にこもるチュリアも、異国の哲学を理解し、ヨーロッパの諸

5) E.シェレルの論文(『両世界誌』1861年2月15日発行)中の表現。19世紀フランスの学界やアカデミックなサークルで、ヘーゲル哲学は「辛うじて身を隠しおおせた無神論」として告発された。この哲学は「世界からその創造者を、創造からその英知を、生からその神的理由と道徳的目的を、人間の魂からその不滅性を奪い取った」という。Cf. ルネ・セロー『ヘーゲル哲学』高橋允昭訳、白水社、1973, p.118. « Sur Isis de Villiers de l'Isle-Adam », GALLIA, No.29.

6) Marlowe, *Marlowe's Plays and Poems, Tamburlaine the Great*, Everyman's Library, 1967, p.24.

王や諸公の動きを手中にしている。自然哲学に通じ、魔術も心得たオカルティストでもある。ナポリがイタリア全土、さらに全世界へと拡大する支配を目指すチユリアの最終目標は「全世界の帝王」だろうか。

唯一の皇帝による世界の支配——帝国理念、帝政理念と呼ばれる——は、一言でいえば、「ローマ帝国復興計画」であるが、普遍的世界の支配の実現もしくは実現の意志を指すものであった。教権と世俗権の二極の中心を持った普遍的キリスト教世界の理念であり、パクス・ロマーナを成し遂げたアウグストゥス帝の黄金時代、キリストが生まれた時代への回帰という精神的な意味での革新を含んでいた。歴史的にみると、カール大帝の戴冠が、ヨーロッパ全体がローマ帝国の後裔であるという観念、逆にいえば、ローマが全世界を統一するという観念を再燃させたのである。また大帝自身もキリスト教世界の指導者としての使命を自覚していた。次に帝国理念を実現するかにみえたフリードリヒ2世は、父方から神聖ローマ帝国、母方からノルマン・シチリア王国の二つの王冠を得、パレルモの宮廷に、ラテン・カトリック、ギリシャ東方正教、アラブ・イスラムと異なる文化的背景の学者を集めて、汎地中海文化の香り高い中央集権国家を樹立した。その後、教権の肥大化から起こる不和・不幸が増大するにつれて、中世末期には、教会を改革して秩序を取り戻す強力な帝政の出現が期待されるようになる。その最も際立った言明は、ダンテの『帝政論』であろう。あるべき世界秩序のためには、人類は二つの指導的権力、すなわち人類を永遠なる生の啓示に導くローマ教皇と、哲学の教えに基づき現世的な幸福へと導くローマ皇帝を必要とすると説くが、皇帝派に組するダンテの考えでは、地上の幸福は天上の幸福に匹敵する。唯一の君主が世界を統べる帝政がもたらす世界平和の中でこそ、人類は自由自在に己の能力を発揮して、地上の楽園へと導かれるというのである。ダンテの帝政理念は、教権の肥大化やその弾圧的態度への抗議という歴史的な文脈の中でとらえられねばならぬが、現状の不幸からの人類の救済を願い、平和と正義がこの地上に恒久的に打ち立てられるべきだという古くからの黙示録的思潮も認められる<sup>7)</sup>。

そして中世最後の皇帝として帝国理念の実現を最も期待されたのがカール5世であった。父方からハプスブルグ家の神聖ローマ帝国、母方からスペイン両王国を受け継ぎ、その版図は、フランドル、オーストリア、ドイツ、イベリア半島からナポリ、シチリア、サルディニア、さらに新大陸、極東フィリピンにまで及んだ。大航海時代、宗教改革といった政治、宗教、経済の動揺激しい16世紀ヨーロッパにあって、広大な領土を治め、宿敵フランソワ1世、ルター派のドイツ諸侯、領内に侵入するトルコ、地中海を跋扈するイスラムの海賊、それらすべてとの戦いにおいて自ら陣頭に立った。生来のカトリック信仰に基づくが、エラスムス的な中立主義に倣って新教旧教を調停し、異教徒の侵害を退けて、普遍的世界統一の夢に最も近づいたかにみえたカール5世の没後、この理念は、ヨーロッパの各国民国家の版図内での行動様式やプロバガンダに形を変えていったようである。

7) マリーナ・マリエッティ『ダンテ』藤谷道夫訳、白水社、1998、p.81.

フランセス・イエイツによれば、帝国の主題は、イギリスのエリザベス女王やフランスのアンリ4世らへと託されていくことになる。そしてこのような国家レベルでの秩序への期待は、「黄金時代の再来」「正義の処女アストライアの帰還」「失樂園以前のアダムへの回帰」などの言葉で表されていたという。一方、民衆レベルでの秩序の回復への期待は、中世以来の転変地異や疫病などの危機、十字軍派遣、修道院の創立、近世にはいつの農民一揆や宗教改革、反宗教改革などの混沌の中で、時代の心理的な必要として、秩序を取り戻す救世主の王国、神聖なユートピアを、神によって定められた神秘的王が打ち立てるという千年王国的思想として脈々と流れていた。トマス・モアの『ユートピア』やフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』、カンパネラの『太陽の都』などのユートピア文学が相次いで著わされた16-17世紀であったし、清教徒革命にみられるように、潜在的に革命的性格を帯びていたといえるだろう。このように中世末期から近世にかけての精神史の流れにあって、「帝国理念」の含んでいた政治的・宗教的意味を考えてみると、とりわけ変化が激しく秩序の回復への期待が高い16-17世紀のヨーロッパで、帝権による正しい支配と平和の維持という高邁な理念にみえるが、実のところ、個人的な領土拡張の野望の破壊的エネルギーを、一つの正義という普遍主義の名の下に正当化したものにすぎないのかもしれない。しかし、王権が元来有する神秘性に加えて、帝権は、四大をさえ支配し、平和を実現し、哲学の教養で人類を地上の楽園に導く力さえあるとされたのである。

この帝国理念の二面性は、ファウスト的テーマを含んでいる。フランセス・イエイツはマーロウの作品群を反ルネサンス的・反宗教改革的プロパガンダと解釈しているが<sup>8)</sup>、ゲーテの『ファウスト』も「権力」や「支配」についての論議を呼ぶ。海辺の領主となって権力の頂点に登りつめたファウストは、干拓事業を進め、自由な大地の上に自由な民との共同作業を夢見るが、その瞬間が人生の理想、人類の理想であると満足したため、メフィストとの賭けに敗れる。最高の瞬間が中身の無い瞬間であったというメフィストの言は、理想的秩序に対する幻想——ユートピア的地上楽園の夢は、実は《self-aggrandizement》にすぎない——というゲーテの歴史認識であろうか。そのファウストが救済されるのは何故か。

『イシス』の中で帝国理念そのものは扱っていないが、カール5世の生涯については少なからぬ言及がある。「シーザーよりも偉大になり、三つの帝国の王冠を我が物にした後」、晩年はイエズス会修道院に隠棲した「戦士、偉大な政治家、聡明な立法者、ヨーロッパの覇者」であったカール5世の生涯は、行動主義の一例として、「信仰は一つの信念ではなく行為であり、時に臨み、己の占める場に応じて、できる限り明々白々おごそかな事実そのものとなることである<sup>9)</sup>」というフォルシアニ公の格言に続く。一方、チュリアは、アレキサンダー大王が若くして東征に乗り出したことをウイルヘルムに示唆する。「王座が全イタリアに拡がり、

8) F.イエイツ『魔術的ルネサンス』内藤健二訳、晶文社、1984, pp.170-187.

9) O.C.I, pp.116-117.

それが地球上に拡がるのは初めてではあるまい<sup>10)</sup>」というチュリアの言葉は、ローマ帝国をはじめ、アレキサンダー大王やカール5世らの広い版図の支配、ヨーロッパにとどまらず、東方にさえ拡がる支配を暗示する<sup>11)</sup>。しかし、チュリアの企ては王権篡奪にとどまるものではないらしく、「驚くべき世界規模の利害関係をもつ仕事——何かしら恐るべき、途方もない、未知の何ものか<sup>12)</sup>」と形容されたり、「人類の理性そのものを疑いかねないようなある総体的で絶対的な驚き<sup>13)</sup>」という預言めいた言葉で暗示されたりするのである。

## II. 変革

チュリアの「全世界の支配」の表層をなす「帝国の主題」と底流に流れるオカルティズム的「世界の変革」を結び、説明するのが、『イシス』の舞台であるフランス革命前夜1780年代末（チュリアは1761年生まれで26-27歳と設定されている）イタリアで広がっていたフリーメーソン等の秘密結社の存在であると思われる。1717年にイギリスで創立された近代フリーメーソンであるが、1730年以降、イタリアでもフィレンツェなど各地にロッジができ、特に貴族層が多く出入りするようになった。その中でもイタリアのかかえる諸問題やその後進性を強く意識する若い世代からは、後のリソルジメントにつながる多くの改革者が生まれた。イタリアはスペイン支配と反宗教改革の結果、階層社会となり、厳格なヒエラルキーと体制に順応する人々によってスタティックな社会秩序が維持されていた。しかし、1750年までにスペインやハプスブルグ家の支配を脱し、新しいヨーロッパの影響を受けて、イタリアの政治機構や学問の潮流に変化が生じる。イエズス会によって擁護されていた教会の権威や教会による教育に反対する運動は、新しい合理主義やフリーメーソンがもたらした新しい科学的思考によって弾みをつけられたのである。ニュートンやロックの思想がイタリアの近代的知識人の思想や学問研究の自由への関心の新しい武器となったが、これらの思想の普及を促す役割を果たしたのもメーソンのロッジであった。特に南部（『イシス』は初めフィレンツェ、後に『王位要求者』とともにナポリ王国が舞台）の知識人の間に浸透したフリーメーソンは、原則的には政治介入しない思弁的性格の結社で、イギリスにおいては、時の政治権力に忠誠を誓い道徳的向上を目指す博愛的団体であったが、フランスやイタリアでは政治活動に結びつくことが多かった。基本的には、君主が合理主義と啓蒙主義の漸進的な進歩を具現するものとみなし、これを信頼していたので、既存の諸制度の破壊を目的とする急進的なものではなく、ナポリ王国では、フェルディナンド4世の妃 MARIA・カロリーナに公然と支援され、指導的な改革者や閣僚もメンバーとして名を連ねている。ナポリが国際的性格を持

10) *Ibid.*, pp.192-193.

11) 『王位要求者』では、汎地中海帝国を築いたフリードリッヒ2世の末裔が王位要求者となるが、史実では、皇帝の孫は16歳で処刑され血筋は絶えている。

12) *O.C.I.*, p.128.

13) *Ibid.*, p.138.

ち、外国人旅行者や書籍が国内に絶えず流入することも、メーソンの活発な活動を促した。しかし、1786年に、政治結社イルミナーティ(1776年ドイツバイエルンに設立された啓明結社)のメンバーがナポリに到着し、その急進的平等主義によってメーソンの非政治主義に飽きたらぬメンバーを吸収することもあった。また、フランス革命勃発後は、ジャコバン主義がロッジを通じてイタリアに広まり、そのうちのいくつかは革命クラブに変わって、当局に「ジャコビーノ」と呼ばれるようになる。ナポリでの主な構成員は貴族であったが、これらのグループが掲げた目標は様々で、既存の政治状況の中での変革を議論したり企てたりした際に、フランスの例に啓発されたという意味で「ジャコビーノ」の呼称を得たようだ。これは後のリソルジメントのいわば初期微動としての愛国運動の一形態といえる。一般に共和主義的進歩思想の傾向をもつジャコビーノの中でも、特にメシア的な調子で将来の社会を論じる急進的なジャコビーノは「独立と共和制は、この地上の合理的な再生に向けての第一歩である」と考えていた。そして、その再生は「イタリアで始まって全人類を蘇らせるものであった<sup>14)</sup>」。

以上、たどったように、フランス革命前後までのイタリアにおけるフリーメーソンの性格は、思弁的なものから次第に改革や革命色を帯びた政治的なものになっていったようだ。チュリアの企ては、王権篡奪の中に、どの程度社会改革の意志を含んでいたのだろうか。後の『王位要求者』では、『イシス』より数年後の1790年代、改革や革命の嵐が迫っている状況に設定されている。『イシス』ではフリーメーソンやその他の秘密結社についての言及はないものの、秘密結社の思弁的な部分、教義や象徴的儀式の断片が、シンクレティックな形で認められる。例えば後年『アクセル』の中で言及される「薔薇十字団」であるが、ブルワー・リットンの『ザノーニ』のテーマにもなっているこの教団は、その實在の有無はともかく、17世紀初めのドイツで二度作者不詳のマニフェストを残している。当時のドイツ、フランスに騒動を巻き起こし、その後イギリスに渡ったらしいこの教団の思想は、フリーメーソン創立の母体になったといわれている。このマニフェスト——薔薇十字宣言——は先に述べたような16-17世紀の政治的、宗教的、知的状況を映したものであった。新教・旧教の争いの中で、旧教ハプスブルグ勢力の普遍主義に対抗する新教側が、教会と帝国の改革を目指す宗教運動の一表現として放った、非常に神秘主義的色合いをもつ、普遍的改革の黙示録的なメッセージであった<sup>15)</sup>。フランセス・イエイツはこの「宣言」の出所を、ジェームス1世の王女エリザベスとファルツ選帝候フリードリッヒ5世の結婚によって新教勢力が連帯すること、候がカトリック反動勢力に対抗する改革のリーダー的存在に

14) スチュアート・ジョーゼフ・ウルフ『イタリア史 1700-1860』鈴木邦夫訳、法政大学出版局、2001、pp.294-295。

15) 飢えや貧困、病苦や旧弊を克服する。地球上のすべての国々やその秘密を知る。あらゆる本に書かれていることをたった一冊の本の中に読む。教皇の圧政が打倒される。終末が来る前に不可思議を預言する新星が出現する。大いなる改革は千年王国、つまり楽園のアダムの状態への帰還となる、云々。

なることを期待する、カップル周辺の人々と推定している。女史は、この「宣言」を、「ある世界に関する、ユートピア的神話の形をとった啓蒙運動の布告」と見、その世界では「ほとんど精霊にも比すべき啓蒙化された存在が、善行を施し、病を癒し、自然科学や技術の分野の知識を広め、失寵以前の楽園の状態に人類を復帰させようと務めている」と定義している<sup>16)</sup>。結社の実在性は疑問視されているが、その教義や精神は、時代の要請に合致するものであったと思われ、後の実在する秘密結社に受け継がれたとしても不思議はない。マクロコスモスとミクロコスモスの調和をはじめ、「宣言」を貫くヘルメティズム、グノーシス主義、カバラなどは、『イシス』全体に認められるものであるし、先に指摘したような預言めいた語り口も共通している<sup>17)</sup>。ウィルヘルムとチュリアのヘルメティックで古代密儀を思わせる結合や、六千年の世界の歴史が終末に近づいている予感など、教義の思弁的部分の影響がみられる。さらに重要なのは、この結社を最も特徴づける教義が、「病人を無料で治療する」という行動的な博愛主義であることだ。チュリアも夜間、男装して貧者に施したり、病人を治療したりする。

このように『イシス』には、秘密結社への直接の言及はないものの、マニフェストから推測される薔薇十字団の教義、もしくはフリーメーソンに受け継がれた薔薇十字的思想に影響を受けたと思われる、千年王国的終末論とオカルティズム的な普遍的変革へのメッセージが認められる<sup>18)</sup>。千年王国論と改革の組み合わせは、清教徒革命をはじめ、革命にしばしばみられるものである。一方、『王位要求者』では、オカルティズムの変革の曖昧さは消えて、具体的政治的変革に焦点は移り、改革派貴族と専制君主の対立が描かれる。王位要求者セルジウスの民衆を前にしての演説は、「思想と学問と自由を標榜する知識人を宮廷に招き、彼らから勇氣、誇り、信念を学び、彼らの説く世界の大義を受け入れるならば、我らが民族の希望の何たるかを理解することができるであろう<sup>19)</sup>」と、啓蒙的進歩的思想信条を表明しており、まさに18世紀末イタリアの改革精神に溢れた理想的君主のものである。モルガースの支配への欲望は、チュリアのようなファウスト的魔術的支配とは性格を異にする。アメリカの独立戦争を扱った『新世界』では、共和主義的自由が王制を打ち破る。これらは『イシス』が小説であるのに対して、『王

16) F.イエイツ『薔薇十字の覚醒』山下知夫訳、工作舎、1986、p.289.

17) 16-17世紀の天文学的預言の流行と、ルターやフィオーレのヨアキムの千年王国論的預言は、改革が切迫していると予告していた。そのうちの一つである「大熊座の獅子」の予言は、北から来て鷲を征服する「獅子」と「その聖職者集団」が熾烈な戦闘の後、ついにヨーロッパ、アフリカおよびアジアの一部を支配するに至り、世界に幸福な時代をもたらすという内容である。鷲は皇帝派の、獅子は反皇帝派の紋章に多く使用された。ウィルヘルムもドイツの出身であり、この預言の筋書きは注目に値する。Cf. ロラン・エディゴフェル『薔薇十字団』田中義廣訳、白水社、1991、pp.26-30. アラン・ブロー『鷲の紋章学』松村剛訳、平凡社、1994、p.101.

18) 『イシス』に「薔薇十字精神の息吹が感じられる」とエディゴフェルも指摘している。一方、リラダンが『イシス』執筆にあたって、両シチリア王国史、ナポリ革命史、フランス革命前後のイタリア史などを参照した可能性が指摘されており、フリーメーソンの活動も当然知っていたと思われる。Cf. O.C.I, p.1080.

19) O.C.I, p.323.



位要求者』『新世界』は戯曲であって、テーマの具体性や登場人物間のアンタゴニズムが求められることにもよるが、『イシス』執筆時 21 歳の作者が、イタリアのリソルジメントやコミューンの乱、共和制の確立などの政治的変遷をくぐって、思索を深めてきた証であろう。

ウンベルト・エーコの『フーコーの振り子』のメイン・テーマをなすテンブル騎士団から薔薇十字団を経てフリーメーソンへとつながる西欧の裏の精神史。これらの秘密結社に全ヨーロッパの王権と神権を転覆せしめる「全世界の支配」の企図は果たしてあったのだろうか。未完の『イシス』についても、すべて推測の域を出ない。チュリアの「全世界の支配」は、『イシス』の幻の続編の最後で、地獄落ちの運命をたどるのか、あるいは救済されるのか。その答えは晩年の『アクセル』に求められることになるだろう。

(鳥取大学非常勤講師)

#### 主な参考文献（文中に引用したものは除く）

- Geneviève Bianquis, *Faust à travers quatre siècles*, Aubier, 1955.  
 柴田翔『ゲーテ「ファウスト」を読む』岩波書店、1986。  
 ジュゼッペ・クアトリエリオ『シチリアの千年』真野義人訳、新評論、1997。  
 ヴェントゥーリ『啓蒙のユートピアと改革』加藤喜代志訳、みすず書房、1981。  
 A.モミリアーノ他『異端の精神史』桜井万里子他訳、平凡社、1987。  
 岩井淳『千年王国を夢みた革命』講談社、1995。  
 田村秀夫『ユートピアと千年王国』中央大学出版部、1998。  
 E.カントロビッチ『王の二つの身体』小林公訳、平凡社、1992。  
 同上『祖国のために死ぬこと』甚野尚志訳、みすず書房、1993。  
 F.イエイツ『星の処女神エリザベス女王』西澤龍生訳、東海大学出版会、1983。  
 同上『星の処女神とガリアのヘラクレス』西澤龍生訳、東海大学出版会、1983。  
 江村洋『カール5世』東京書籍、1992。  
 アンリ・ラベール『カール5世』柴田秀藤訳、白水社、1975。  
 モンタネリ『ルネサンスの歴史』藤沢道郎訳、中央公論社、1985。  
 森田鉄郎編『イタリア史』山川出版社、1976。  
 藤沢道郎『物語 イタリアの歴史』中央公論社、1991。  
 菊池良生『戦うハプスブルグ家』講談社、1995。  
 セルジュ・ユタン『秘密結社』小関藤一郎訳、白水社、1972。  
 ポール・ノードン『フリーメーソン』安齋和雄訳、白水社、1996。  
 澤井繁男『魔術と錬金術』筑摩書房、2000。